

令和7年度

瀬戸まちの課題解決応援補助金

活動実績集



瀬戸市 市民生活部 多様性協働課

目次

はじめの一步部門

- 伝統文化ふれあい体験活動 登り窯焼成 . . . 1
しなの登り窯実行委員会
- 子どもカフェ ～自由に過ごせる居場所～ . . . 3
子どもカフェ
- みんなで育つ！はたらく親のひろば . . . 6
働くパパママのしゃべり場
- 瀬戸に灯りをともそう . . . 8
せときら実行委員会
- せと・森のようちえん留学 . . . 10
せと・森のようちえん留学実行委員会
- 主に母親の心の休息を目的とした子育て支援 . . . 14
しんこきゅう

テーマ型協働活動部門

- テーマ「災害に備えるデジタルディバイド対策」
災害時のデジタルディバイド解消プログラム . . . 16
特別非営利活動法人デジタルライフサポーターズネット×情報政策課
- テーマ「ツクリテによるまちの賑わい創出」
瀬戸ならではの現代アート～展覧会物語は続いていく～ . . . 21
瀬戸現代アート倶楽部×商工観光課

■テーマ「ツクリテによるまちの賑わい創出」

瀬戸の現代アートスタジオによる芸術文化交流事業・・・ 24

芸術文化交流事業

タネリ スタジオ ビルディング × 商工観光課

■テーマ「外国人住民もまちづくりの担い手となる多文化共生のまちづくり」

日本語教室から始める多文化共生のまちづくり・・・ 27

特定非営利活動法人エム・トゥ・エム × 多様性協働課

事例 1

伝統文化ふれあい体験活動 登り窯焼成

しなの登り窯実行委員会

課題・目的

地域の伝統文化に触れる機会が少なく、郷土愛やまちへの誇りを持てる体験ができていない。登り窯での焼成体験を通して、伝統文化への関心を高め、郷土愛の醸成に繋げることを目的とする。

事業内容

登り窯で児童生徒や瀬戸にゆかりのある作家の作品を焼成し、見学会等を行う。

事業成果

- ・品野中学校の美術窯業部員7名が自分たちの作品焼成を見学。
焼成を指導してくださった陶芸家の先生から登り窯の歴史や構造、焼成方法などについての説明を受け、窯から立ち上る炎や熱気を間近で体感。
本物の迫力に触れた生徒たちからは地域の伝統文化への関心を一段と深めている様子が見られた。
- ・多くの児童、生徒の作品を焼成することにより、保護者や地域の方が見学に来てくださり、映像でしか見たことのない光景を実際に目の当たりにすることで多くの感動の声や、来年も参加したいとの声を多数いただいた。
また改めて陶芸に興味、関心を持つことで、地域の陶芸に関するイベントなどへ足を運びきっかけづくりにもなった。
- ・窯業訓練校や工科高校専攻科の生徒さんに参加いただいたことで、作業の指導等を通じて作家さん達との交流が進み、今後の作家活動の幅の広がりや伝統文化継承の担い手の育成にも繋がったと感じた。
- ・私たちの活動が広く地域の方に伝わることで、品野台小学校の登り窯の存在意義の見直しや、復活をのぞむ声を多くいただく事ができた。

独自性

今年度の焼成も名古屋学院大学のご協力をいただき、保護者同士のネットワークを通じて品野ブロックに留まらず他ブロックの学校児童やその保護者、地域の陶芸家さんや訓練校の生徒そして一般の参加者の方々に参加いただき、「しなの」をはじめとする多くの方々を結びつける事ができた。

活動の内容

<実施方法>

実施時期：2025 年 10 月 11 日(土)12 日(日) 窯詰
10 月 12 日(日)～15 日(水) 焼成
10 月 18 日(土) 窯出し

実施場所：名古屋学院大学瀬戸キャンパス内 登り窯『創造窯』

活動内容：品野ブロックをはじめとする市内小中学生とその保護者、地域の方々
瀬戸にゆかりのある陶芸家さん、海外の陶芸家さん、窯業訓練校や工科高校
専攻科の生徒さんの作品を伝統の登り窯で焼成した。小中学生やその保護者、
一般の方の作業や焼成の見学を行った。

参加人数：作品を焼成した人数 約 120 名 その他見学者多数

<周知方法>

- ・Instagram による活動の紹介
- ・昨年参加していただいた方々や保護者同士のネットワークによるご紹介

団体プロフィール

しなの登り窯実行委員会

活動開始年：2023 年

代表者：篠田和明

会員数：20 名

事例2

子どもカフェ ～自由に過ごせる居場所～

子どもカフェ

課題・目的

学校や家庭で様々な悩みを抱える子どもたちがいる。息抜きや気分転換に何かを学ぶ等自由に集える場所を提供することで、生きづらさの解消を目指す。

事業内容

第1及び第3金曜日に、ひしのミナクルにて子どもカフェを開催する。また、臨床心理士による子どもカフェスタッフ勉強会を行う。

事業成果

- ・小学生～対象としていたが、地域の幼児親子が毎回来てくれる。ミナクルの方もワークショップに参加してくださり、みんなで子育ての話をしたり、工作を楽しんだり地域の人々の居場所となっている。ボランティアと、地域の人で子どもを見守れていると思う。
- ・滞在時間が長くボランティアさんも駄菓子を買ったり、子どもカフェをたのしんでくださるため、駄菓子屋（ミナクル）の売り上げにも貢献できている。
- ・また来たよーと、子どもカフェ常連さん（小学生）が増えてきたと思う。学校配布のチラシをチェックして好きな日に来ている。暑い日や寒い日にたまたま駄菓子屋に寄った子も、誘うと、工作等イベントと一緒に楽しんでもくれる。
- ・初めの頃より、ボランティアさんに どうやるの？これやろうよ、これ見て！と気軽に声をかけてくれる空気感になってきた。
学校であった嫌な事をボランティアさんに話し、工作や活動でリフレッシュして笑顔で帰っていく姿が見られる。
- ・習い事をしている子もいるが、さまざまなワークショップを開催することで、家や学校ではできない体験ができている。
- ・「ポルトガル語であそぼ」の開催の日、ブラジルルーツのある中学生男子に声をかけたところ、喜んで友だちを連れてきて、イベントに参加してくれた。挨拶をゲームにする事で、参加者みんなで盛り上がり、ブラジル流のコミュニケーションを取り、日本人の子は、ブラジルの文化を自然と理解することができたと思う。参加者には、ペルーの子がおり、母国についてもやって欲しそうだった姿もあった。
たくさんのボランティアさんが出入りしてくださることで、子どもたちが、家庭や学校以外で、大人と関わる機会が持てる機会となった。地域の大人との距離感も縮まり、

自分の話をしてくれる子もいる。

安心した場所で、第三者の大人に話しかけてよい場所として家庭や学校以外の居場所になってきているのではと思う。

独自性

- 人材
生きづらさを抱えた幼少期思春期の経験のあるスタッフの寄り添い
教員免許、保育士免許保有のスタッフ
子どもたちと年齢が近い、学生ボランティア
- たくさんの人に触れ合える機会が持てるようなイベント、講座の開催
(プラ板作り、アロマで虫よけスプレー、ストレッチ、バランスボール、かき氷を食べよう、お花でガーランド作り、ミサンガ作り、ハロウィン工作、編み物、パステルお絵描き)
- ポルトガル語であそぼ
ブラジルルーツのある講師の、挨拶ゲーム、日本とブラジルの動画（大使館発信の動画）挨拶は、コミュニケーションをとるうえでの“まほうの言葉”を合言葉に、年齢、国籍、ルーツは関係なく遊び学んだ。
- 臨床心理士による、研修、相談会
1回目は、スタッフが同じ方向を向いた寄り添いができるように、代表の気持ちを聞き、想いを共有し、多文化共生地域でスクールカウンセラーをしている臨床心理士を迎え、子どもの姿や、関わり方を学んだ。
2回目は、臨床心理士に、子どもカフェ現状を伝えて、具体的ななかかわりや、声掛けのし方、見守り方の相談をした。
- コミュニケーションツールとしてボードゲームの導入
→ゆっくり過ごしたい子より、認めてほしい子どもたちが多く、ボードゲームをすると人がとられてしまうため、全員にかまうことができないため、主にワークショップに誘っている。子どもと遊び慣れた男性スタッフがいる場合、ワークショップと、かるたのゾーンが出来た。ボランティアさんの適性もあるため、無理のない活動にしている。
- 宿題したい子どもへの学習支援
→金曜日開催であることもあり、宿題を持ってくる子はいなかった。
夏休みは1組のみ日誌持参で参加があった。
遊びたい気持ちが強い。

こちらが想定していた子どもたちの姿とは、違う子どもたちの参加だったので、必要として来てくれる子どもたちと、地域の需要に合わせていきたい。

活動の内容

1 こどもカフェ

実施時期：第1及び第3金曜日（令和7年5月16日～令和8年2月6日の15回）
→8月22日、12月5日、1月2日については、長期休暇の集客が少ないことから、2月20日については、補助金報告作業のため実施せず。

実施場所：ひしのミナクル

実施内容：通常の子どもカフェ2回、おやつイベント4回、講師イベント10回
全16回

→おやつイベント、講師イベントは当初予定通り実施。
ワークショップがある時の方がメリットが多かったため、一部変更して、ボランティア講師を招いて実施。

参加人数：各回10名、スタッフ3名を予定していたが、毎回大幅に上回る参加となった。計523名が参加した。

	実施日	実施事業	参加数
1	5月16日	プラ板作り	32
2	6月6日	のんびり	30
3	6月20日	アロマで虫よけスプレーを作る	30
4	7月4日	ストレッチ	27
5	7月18日	宿題を一緒に行う	28
6	8月1日	カキ氷を食べる	30
7	9月5日	お花	23
8	9月19日	ミサンガを作成	48
9	10月3日	ハロウィン会	40
10	10月17日	身体動かす	37
11	11月17日	編み物	32
12	11月21日	ポルトガル語であそぼう	27
13	12月5日	お絵描き	29
14	12月19日	クリスマス会	57
15	1月6日	書初め、お餅を食べる	26
16	2月6日	ヨガ	27
		合計	523

2 スタッフ勉強会
当初予定通り、2回実施

実施時期：2025年6月7日、12月14日

実施内容：臨床心理士による、研修、相談会

参加人数：計21名

団体プロフィール

子どもカフェ

活動開始年：2024年

代表者：赤尾千史

会員数：5名

事例3

みんなで育つ！はたらく親のひろば

働くパパママのしゃべり場

課題・目的

仕事育児の両立に悩む子育て世代の居場所の活動の認知度が低く、男性の参加者も少ない。また、活動を行う際の見守り隊へのサポートが不足している。孤独な子育てをなくす、「チーム我が家」の構築を促す、見守り隊を安心して参加できるボランティアにすることで、働くパパママが安心して自分らしく生き生きと働き子育てできるまちを目指す。

事業内容

夫婦参加型の講座を実施する。また、見守り隊の説明会を開催する。

事業成果

- ・相談できる場の認知度向上

瀬戸市内全保育園 29 か所を通じて団体チラシを配布し、子育て支援拠点や産婦人科等にも配架した。子育て未来課・保育課の協力により、行政との連携による信頼性が高まり、安心して参加しやすい環境づくりにつながった。

- ・幅広い保護者層への波及

育休中の不安に限らず、社会復帰や働き方の見直し、パートから正職への転換など、さまざまなライフステージの相談が寄せられた。仕事と育児の両立は継続的な課題であり、本事業が幅広い層に届いていることが確認できた。

- ・地域のつながりと共育での促進

気軽に参加できる機会を増やしたことで、参加者同士の横のつながりが生まれ、地域で声を掛け合う関係性が育まれた。これにより、まち全体で子どもを育てる「共育て」の環境づくりに寄与している。

独自性

- ・地域を巻き込んだ周知・理解促進

参加者への直接的な支援にとどまらず、周知活動を通じて行政、地域のクリニック、店舗等に対して、現在の子育て家庭が抱える課題や背景への理解を広げることができた。これにより、子育て家庭を地域全体で支える意識が醸成され、子育てしやすいまちづくりにつながった。

・他団体との協働による相乗効果

市民活動団体「せとオヤ子育てプロジェクト」と協働し、一尾氏を講師として招き、せとっ子ファミリー交流館にて子育て講座を開催した。専門的かつ実体験に基づく講話を通じて、参加者の子育てに対する不安の軽減や、各家庭の子育て方針を見つめ直す機会を提供することができた。

活動の内容

実施時期：実施事業一覧のとおり

場所：せとっ子ファミリー交流館、スターバックス、ますきち、瀬戸市体育館、サガミ

内容：仕事と育児の両立に不安や悩みを抱える保護者が、安心して気持ちを話せる場を設けた。「ワーママカフェ」では育休中、復帰後、社会復帰前のママたちの座談会を実施。「せとっ子パパ育」では子育てを共有、楽しむパパの集いを実施。「読書会」では、自分軸をみつけることを目的とし、一つの本をみんなで読み、話し合う読書会を実施。他にも子育て講座を2回実施。計7回の事業を開催した。

参加人数：計 35 組

実施事業一覧

	実施日	実施事業	参加数
1	5月25日	ワーママカフェ	2組
2	6月18日	スタバでふらっと読書会	4組
3	8月2日	せとっ子パパ育	5組
4	9月21日	築こう！チーム我が家講座	4組
5	10月8日	スタバでママカフェ	9組
6	11月5日	サガミでママカフェ	7組
7	12月7日	子育て講座	4組

＜周知方法＞チラシ、SNS

団体プロフィール

働くパパママのしゃべり場

活動開始年：2024年

代表者：大塚妙佳

会員数：5名

事例4

瀬戸に灯りをともそう

せときら実行委員会

課題・目的

瀬戸市はレトロな町並みが残っており、とても住みやすい街であるが、一方で、青の広場周辺などは、照明が少なく、暗い印象を与えている。夜の街に明るさや賑わいがないことで人通りが減少し、飲食店の夜間営業が縮小するなど地域の活気の低下にもつながるおそれがある。そこで、本活動では、夜の街に賑わいを取り戻し、市民が住んでいて楽しいと感じられる街を目指して、イルミネーションやライトアップイベントを開催する。また、瀬戸市を訪れた観光客に対しても活気のある街を提供することで、瀬戸市のイメージアップにつなげることを目的とする。

事業内容

尾張瀬戸駅前周辺でイルミネーションを行うと同時にイベントを開催する。

事業の成果

青の広場周辺などは、暗い印象があったが、あめんぼうまつりの隣にせときらを実施したことにより、街並みが更に明るくなり、地域の皆さまやあめんぼうまつり来訪者の方々にも喜んで頂けた。

独自性

- ・せときら実行委員会が、あめんぼうまつり隣のせときらを実施したことは、今までに誰も実施していないせときら実行委員会ならではの視点と手法を活かした事業である。
- ・特に今回は、紙袋に保育園児から小学生までの子どもたちに絵を描いてもらい、紙袋をライトアップして行ったイルミネーションは、地域の皆さまやあめんぼうまつりの来訪者から喜んで頂いた。

参加頂いた団体	東保育園	50作品	瀬戸北保育園	50作品
	たいよう児童クラブ	30作品		
	おひさま児童クラブ	30作品	せと野外保育所	30作品
	にじの丘放課後学級	30作品	タネリスタジオ	5作品
	他 有志からの作品	25作品	計	250作品

活動の内容

実施時期：令和7年11月8日（土）～令和7年11月9日（日）

実施場所：青の広場周辺

活動内容：青の広場周辺を子ども達に描いてもらった紙袋でライトアップした。

参加人数：約200人

団体プロフィール

せときら実行委員会

活動開始年：2024年

代表者：山内多枝子

会員数：10名

事例 5

せと・森のようちえん留学

せと・森のようちえん留学実行委員会

課題・目的

瀬戸市の自然環境を活かした子育て環境、多様な教育環境などの認知度は低く、移住希望者にとって情報が不足している。移住希望者が地域と自然につながる機会が不足している。移住希望者が瀬戸市の豊かな自然環境と地域の暮らしを体験し、移住への具体的な一歩を踏み出せるよう支援する。

事業内容

「せと・森のようちえん留学」として、都市部から瀬戸市への移住を検討している子育て世帯に対し、2泊3日程度、子育て体験、地域交流、市内各所の見学等を行う。

事業の成果

・参加者への効果（当事者への公益性）

本年度は計2回実施し、延べ5家族が参加した。第1回参加者全員が第2回にも参加するリピート率100%となり、継続的な関係づくりにつながった。

参加者からは、以下の声が寄せられた。

子どもが自然の中で主体的に遊び、挑戦し、成長する姿を間近で見守れたことへの感動
日常では得られない「火」や「森」との深い関わりによる、生きる力の芽生え

異年齢の子ども同士や地域住民との自然な交流による安心感

これにより、参加した親子にとって、自然と共にある子育てや暮らしの価値を実感できる機会となり、ウェルビーイングの向上に大きく寄与した。

・地域課題への対応

移住と定住の促進と体験機会の不足

→ 二泊三日～一泊二日の短期滞在を通じ、森での保育体験、地域散策、住民との交流、郷土文化体験を組み合わせることで、瀬戸での暮らしを具体的にイメージできる機会を提供した。

自然環境と教育資源の周知不足

→ 森のようちえんの実践と瀬戸の自然を体感するプログラムを通じ、都市部の子育て世帯に対して、自然・教育の切り口から瀬戸の魅力を効果的に発信した。

地域コミュニティの活性化

→ 地域住民（移住者家族4組、百姓家スタッフ2名等）が協力し、交流会や文化体験（お月見どろぼう、おこしもんづくり）を実施。都市部参加者と地域住民の双方向交流が生まれ、新たなつながりが創出された。

地域活動の連携強化

→ 森のようちえん活動を軸に、自然・教育・暮らし・文化の各要素を結びつけることで、瀬戸らしい地域資源の統合的な活用モデルを構築した。

- ・ 地域・社会にもたらした成果

移住検討の入口づくり

参加者の多くは、住宅所有や就学事情から即時の移住には至らなかったが、「継続的に関わりたい」「定期的に訪れたい」との声が多く、瀬戸のファン＝関係人口の創出につながった。

瀬戸の魅力の再発見と可視化

参加者の印象や感想をまとめて、瀬戸について「ほどよく街、しっかり自然、そして人が温かい」という言葉が見出された。参加者自身の言葉で瀬戸の魅力が言語化され、今後の広報資源としても活用していきたい。

多世代と多地域交流の促進

子育て世帯、移住者、地域住民が立場を越えて交流し、顔の見える関係性が生まれたことで、地域の受け入れ力の向上とコミュニティの活性化に寄与した。

- ・ 総合評価（公益性・有効性のまとめ）

本事業は、参加者のウェルビーイング向上、関係人口の創出、地域コミュニティの活性化、瀬戸市の魅力発信という複数の効果を同時に生み出す取り組みとなった。

短期滞在型の「森のようちえん留学」は、移住のきっかけだけでなく、まずは関係人口の拡大から移住促進を目指すという新たな地域活性モデルとして高い公益性と有効性を有する事業であると考ええる。

独自性

本事業は、森のようちえん「もりのね」と、シェアハウス綾、ならびに地域ネットワークを活かして、瀬戸市の移住・関係人口創出・地域活性という課題解決に取り組んだ点に特徴がある。

- ・ 「暮らし」そのものを体験する留学型プログラムという独自性

一般的な移住促進施策が「相談」や「情報提供」にとどまる中、本事業では、親子が実際に瀬戸で生活し、地域の中で過ごす短期滞在型の『森のようちえん留学』プログラムを構築した。

参加者は、森のようちえんでの野外保育体験、シェアハウス綾での宿泊・共同生活、地域住民との交流会、郷土文化体験（お月見どろぼう、おこしもん作り等）を通して、瀬戸での「暮らし」「子育て」「人とのつながり」を立体的に体験した。

その結果、「大通りを車で通るだけでは分からない瀬戸の本当の姿が見えた」、「一泊したことで、暮らしや地域環境のイメージが具体化した」との声が寄せられ、移住検討や関係人口化への確かな入口づくりとなった。

- ・ 「自然×教育×暮らし」を一体化した体験設計という独自性

森のようちえん「もりのね」が日常的に実践している野外保育を、留学プログラムの中核に据えたことも、当団体ならではの独自性である。

単なる自然体験イベントではなく、子どもが主体的に遊び、挑戦し、学ぶ「日常の保育」

に親も伴走する形、現代では体験機会の少ない「火」や「森」との深い関わり、異年齢の子ども同士の自然な関係形成を通じて、瀬戸ならではの教育環境・自然環境の価値を、体感として伝えることができた。

その結果、参加者からは「普段見られない子どもの姿に感動した」、「自然の中で育つ教育の力を実感した」、「(連続で参加して)子どもの成長を実感した」といった声があり、自然を活かした教育が、教育移住・関係人口創出のきっかけになる可能性を示した。

- ・地域住民と協働する受け入れ体制という独自性

本事業は、運営団体のみで完結するのではなく、地域住民を巻き込む形で実施した点にも独自性がある。

具体的には、もりのねの保護者である移住者家族 4 組との交流会、ママ起業家との交流会（せと・しごと塾関係）、百姓家スタッフ 2 名による郷土文化体験指導（おこしもん）など、地域住民が主体的に関与し、参加者と自然な形で交流する機会を創出した。

これにより、参加者は瀬戸の「人の温かさ」「瀬戸でイキイキと暮らす姿」を直接体感できることや、地域側も外部親子との交流を通して受け入れ意識を醸成という双方向の関係づくりが生まれ、単なる体験型イベントを超えた持続的な地域交流モデルを構築することができた。

- ・団体ならではの総合的アプローチの成果

以上のように、森のようちえんによる自然保育の実践力、シェアハウスを拠点とした滞在環境、地域に根差したネットワークを組み合わせた当団体独自の総合的アプローチにより、「ほどよく街、しっかり自然、そして人が温かい瀬戸」という瀬戸市の本質的な魅力を、参加者自身の言葉として引き出すことができた。森のようちえん留学は、移住促進だけでなく、関係人口の創出、教育移住の入口づくり、地域コミュニティの活性化を同時に実現する独自モデルとして高い有効性があると考えられる。

活動の内容

せと・森のようちえん留学プログラムの実施

実施時期：令和 7 年 10 月 6 日（月）～8 日（水）
令和 8 年 2 月 12 日（水）～13 日（木）

実施場所：せと野外保育所もりのね（ねむの森、南公園）
シェアハウス綾（瀬戸市）
たかね百姓家

実施内容：瀬戸市外の親子を対象に、瀬戸市での暮らし・子育て・教育環境を実体験できる短期滞在型プログラム「森のようちえん留学」を実施した。

主な内容は

- ・森のようちえん「もりのね」における野外保育体験
- ・シェアハウス綾での宿泊体験（地域に溶け込む生活体験）
- ・地域住民との交流会の開催
- ・郷土文化体験（おこしもん作り等）

参加人数：第 1 回は 2 家族（大人 2 名、子ども 4 名 計 6 名）
第 2 回は 3 家族（大人 3 名、子ども 7 名 計 10 名）
延べ 5 家族（計 16 名）

特に第2回では、第1回参加家族全員が再参加し、リピート率100%となり、満足度の高さが確認できた。

＜周知方法＞

- ・Instagram 広告配信（ターゲット：名古屋市・首都圏・関西圏の子育て世帯）
- ・団体公式 SNS への掲載
- ・既存ネットワーク（自然保育・教育関係者）を通じた口コミ拡散
- ・チラシの作成と配架（せともの祭り等）

瀬戸市外の子育て世帯を主な対象とし、以下の方法で広報・周知を行った。
主に Instagram の広告が有効で、関東・関西圏からも問い合わせがあった。
また名古屋市・岡崎市など近隣都市圏からも反応が多く、短期滞在型プログラムへのニーズが確認された。

団体プロフィール

せと・森のようちえん留学実行委員会

活動開始年：2025年

代表者：井上健太郎

会員数：5名

事例6

主に母親の心の休息を目的とした子育て支援

しんこきゅう

課題・目的

子育て中のお母さんが心身を休められる場所はまだまだ少なく、産後の子育てが、「孤育て」となってしまうケースも少なくない。

また、育児に追われる日々の中で、自分自身を振り返り、心を休める時間を確保することは容易ではない。

そこで、育児の合間に安心して心身を休め、英気を養うことができる時間と場所を提供することを目的とする。

事業内容

息詰まったお母さんに深呼吸し心を休めることができる時間を提供する。

事業の成果

まだまだ小さな環境のなかでの実感でしかないが、活動の中で出逢ったお母さん達に「元気がでました。」と言葉をかけてもらえたことが、小さな小さな社会ではあるが、お母さんが息抜きできることが、子どもとゆとりを持って関わることになり、結果として、元気なまちへ繋がる小さな一歩、となっているのではないかと感じる。

独自性

当団体では、お寺という静かで落ち着いた環境をお借りし、子育て経験豊富なスタッフや、様々な保育現場で経験を積んだ幼稚園教諭、また保育士としての経験を持つスタッフが中心となって活動している。スタッフがお子さんと遊ぶ中、お母さんとスタッフでゆっくり話しをしたり、カーテンで仕切られたスペースで休憩したり、落ち着いて食事をしたりするなど、心身ともにリフレッシュできる時間を過ごしてもらえよう努めている。

活動の内容

実施時期：毎月 1 回

実施場所：市内お寺のはなれ

活動内容：妊婦、就園前のお子さんを持つお母さんを対象に実施。

お寺のはなれにて、一つの部屋を目的別にパーティションで区切り、スタッフの見守りが可能な範囲でお子さんを対応。

お母さんには心身共にリフレッシュしていただいた。

参加人数：12人

団体プロフィール

しんこきゅう

活動開始年：2025年

代表者：鶴阪さち子

会員数：5名

事例1 テーマ「災害に備えるデジタルディバイド対策」

災害時のデジタルディバイド解消プログラム

特別非営利活動法人デジタルライフサポーターズネット×情報政策課

課題・目的

災害時にインターネットを活用できないデジタルディバイド層が存在し、スマートフォンの利用が防災に活かされていない。災害時の情報収集や位置情報共有など、スマートフォンの活用方法を普及させ、市民の防災力を向上させるとともにデジタルディバイドを解消する。

事業内容

「災害時のスマートフォン活用術」啓発リーフレットの作成及び配布や講習会の実施、防災イベントへのブース出展、出張地域スマートフォン講習会（災害時のスマートフォン活用）の実施。デジタルディバイド層にもわかりやすく災害時のスマートフォン活用方法を啓発する。

事業の成果

- ・瀬戸市の社会課題（まちの課題）の解決

「災害時にスマートフォンを十分に活用できないデジタルディバイド層の存在」という課題に対し、具体的な活用方法の普及を通じて情報格差の解消に取り組んだ。本事業では、啓発リーフレットを計 1,255 件（配布 1,100 部、Web ダウンロード 155 件）提供し、市内 4 つのイベントおよび 6 か所の講習会を通じて合計 298 名に直接的なアプローチを行った。これにより、災害時における情報収集や位置情報の共有といった、命を守るための実用的なスキルを普及させることができた。

- ・「目指すまちの姿」に向けた解決の成果

瀬戸市が掲げる「住みたいまち誇れるまち 新しいせと」および「地域に住まう市民が自立し支え合い、笑顔あふれるまち」の実現に向け、市民が災害時にも安心して行動できる環境を整備した。活動後のアンケートでは、参加者の 97.3%が「リーフレットが役立つ」と回答し、85.3%が「災害時にスマホを活用できる安心感が高まった」と回答している。これは、市民一人ひとりの防災意識が「知識の習得」から「具体的な行動のイメージ」へと進展した実証的な成果と言える。

- ・地域や社会への影響と広がり

本事業の実施により、以下の社会的影響をもたらすことができた。

独自性

- ・社会的な公益の向上

南海トラフ地震等の大規模災害を見据え、情報収集手段の多重化を促進したことで、行政情報（瀬戸市公式LINE等）の到達率向上と、災害時の被害最小化に寄与する基盤を作った。

- ・相互支援体制の構築

地域住民が身近な方のスマートフォン利用を支援する「スマホサポーター」の養成（計13名）を講習会と並行して実施し、地域内での継続的なサポート体制を構築した。

- ・事業の広がり

特定の地区に留まらず、市内6か所の広範な地域および多様な防災・地域イベントとの連携を通じて、デジタル防災の重要性を地域社会全体へ波及させることが期待できるモデルを確立した。

- ・専門的知見と現場視点に基づく教材開発

2017年の法人設立時より、一貫して災害時におけるICT利活用の啓発に取り組んできた専門知識を反映し、独自教材「災害時に役立つスマホ活用ガイド」を制作した。本教材は、当法人スタッフの防災士による監修に加え、能登半島地震において現場を統括した保健師への取材結果を内容に反映させている。これにより、有事の際に実際に直面する課題（電源確保、安否確認の具体的手順等）に即した、極めて実効性の高いプログラムを実現した

- ・操作説明に留まらない多角的な情報リテラシー教育

単なるスマートフォンの基本操作の解説に留まらず、災害時に混乱を招くフェイクニュースへの対策（情報リテラシー）や、通信遮断時のオフライン環境下でも役立つ「撮影しておく便利なものリスト」の提示など、実体験に即した多角的なコンテンツを提供しました。これにより、情報機器を「所有している」状態から、有事の際に「自ら情報を取捨選択し活用できる」状態への引き上げを図った。

- ・イベント出展を通じた広範な啓発と相談体制 瀬戸市社会福祉協議会をはじめとする地域団体との連携により、防災訓練や交流イベントに積極的にブース出展を行った。リーフレットの配布（計1,100部）だけでなく、対面での質疑応答や操作指導を同時並行で実施することで、参加者の個別の不安解消に努めた。

- ・住民相互の「伴走型支援体制」の構築 講習会と並行して、地域住民が身近な方のスマートフォン利用を継続的に支援する「スマホサポーター」の養成（計13名）を実施した。これにより、講習会終了後も地域コミュニティ内で教え合える「伴走型」の支援体制を構築し、デジタルディバイド解消の持続性を高める仕組みを確立した。

活動の内容

1. 啓発リーフレットの制作と普及 制作物

「災害時に役立つスマホ活用ガイド」（A4三つ折り・両面カラー）を1,100部制作。

配架場所：地域交流センター、公民館、主要施設など市内26か所

デジタル展開：当法人Webサイトにデジタル版を公開し、2026年2月1日時点で155件のダウンロードを記録。

2. 防災関連イベントへのブース出展

実施時期：実施事業一覧①のとおり

実施場所：パルティセと（楽しく学ぶ防災・交流フェスタ）

デジタルリサーチパークセンター、瀬戸市やすらぎ会館

活動内容：リーフレット配布、個別相談、スマホ活用術のデモンストレーションを4回実施。

参加人数：合計190名の市民がブースに来場した。

実施事業一覧①

実施日	実施事業	参加者数
8月30日(土)	楽しく学ぶ防災 / 瀬戸市市民活動連絡会（パルティセと）	70名
10月11日(土)	交流フェスタ2025 / 瀬戸市市民活動連絡会（パルティセと）	50名
11月2日(日)	デジタル祭り / 瀬戸市・瀬戸市デジタルリサーチパークセンター（瀬戸市デジタルリサーチパークセンター）	50名
1月25日(日)	ボランティアセンター立ち上げ訓練 / 瀬戸市社会福祉協議会（瀬戸市やすらぎ会館）	20名
	合計	190名

3. 出張地域スマートフォン講習会

実施時期：実施事業一覧②のとおり

実施場所：水野地域交流センター、本地会館、東明公民館、瀬戸市やすらぎ会館

西陵地域交流センター、萩山公民館

参加者人数：合計で108名（うちスマホサポーター13名）。災害時におけるスマートフォンの実用的な活用方法を習得しました。

実施内容：本事業の主要プログラムとして、市内6か所において各90分の講習会を6回実施。1回完結の90分構成とし、独自制作のリーフレットを教材として使用した。

一部の回（本地、東明、萩山台）では、地域住民による伴走型の支援体制を構築するため、スマホサポーター研修を同時に実施。

実施事業一覧②

実施日時	主催団体	参加者数	スマホサポーター数
9月10日(水)	水野地域力向上委員会	27名	—
9月19日(金)	本地地域力向上委員会	14名	5名
10月18日(土)	東明地域力向上委員会	12名	3名
10月24日(金)	瀬戸市健康づくり食生活改善協議会	15名	—
12月12日(金)	西陵地域力推進協議会防災グループ	14名	—
1月30日(金)	萩山台地域力向上委員会	26名	5名
合計		108名	13名

継続性・発展性

- ・今後の事業展開の計画、団体の継続、発展のための計画

制作物の恒久的な活用と維持 本事業で制作した「災害時に役立つスマホ活用ガイド」およびそのデジタル版を、当法人の「完成した資産」として維持・管理。今後実施する自主事業や地域啓発活動においても本教材を基盤資料として活用し、継続的な情報提供を行う。

- ・客観的実績に基づく多様な財源の確保 本事業で得られた「セミナー内容の理解度88.0%」および「リーフレットの有用性97.3%」という高い満足度実績を客観的なエビデンスとして活用する。この実績を強みとして、次年度以降の新たな助成金への応募や企業協賛、寄付金の募集を行い、補助金に依存しない自立的な運営資金の確保に努める。

- ・「協働の仕組み」の定着と地域展開 瀬戸市役所の関係各課（コミュニティ推進課、高齢者福祉課、防災安全課、消防等）や各地域団体との間に構築した信頼関係を維持します。今後は、市の既存事業や定期的な防災訓練の中に本プログラムを組み込む働きかけを継続し、地域社会全体の防災インフラとしての定着を目指す。

協働の効果性

- ・「団体自身」「行政」「その他の団体」の役割分担の結果

当団体（特定非営利活動法人デジタルライフサポーターズネット）

防災士の監修や被災地実務経験者への取材に基づく専門的な教材（リーフレット・講習用スライド）の制作を担った。また、当法人所属の専門講師（防災士）およびスタッフを延べ18名派遣し、質の高い講習および個別相談を実施した。

行政（瀬戸市役所 情報政策課）

事業全体の進行アドバイスや、関係部署（防災安全課、コミュニティ推進課等）との連絡調整を担いました。広報せとや市公式Webサイトを活用した周知活動のほか、市内26か所の公共施設等へのリーフレット配架を行った。

その他の団体（各地域力向上委員会、社会福祉協議会等）

地域住民への講習会告知および受講者の取りまとめ、会場提供を担った。さらに、地域スタッフが「スマホサポーター」として運営に加わることで、受講者がリラックスして参加できる環境を整えた。

・得意分野や特性を活かした相乗効果

信頼性と専門性の融合 行政の持つ高い「信頼性・周知力」と、当法人が長年蓄積してきた「ICT利活用の専門知見」が組み合わせることで、デジタルに不慣れな層に対しても効果的なアプローチが可能となった。その結果、298名への直接啓発という高い実績に繋がった。

重層的な支援体制の確立 専門講師による指導に加え、地域団体による「スマホサポーター（伴走役）」が加わったことで、講習内容の理解度88.0%、実践意欲84.0%という極めて高い学習効果が得られた。

課題解決への波及効果 情報政策課との連携により、瀬戸市公式LINEアカウントの活用等、行政が推進するデジタル施策の普及を防災の観点から後押しし、地域全体の情報リテラシー向上という公益に寄与した。

・協働の仕組みの定着

本事業を通じて、行政、民間（NPO）、地域の三者がそれぞれの得意分野を補完し合う「協働の仕組み」が実証されました。この関係性は、単発のイベントに留まらず、次年度以降の市の防災訓練や既存事業の中に、デジタル防災プログラムを定着させていくための強固な基盤となった。

団体プロフィール

特別非営利活動法人デジタルライフサポーターズネット

活動開始年：2012年

代表者：友次進

会員数：17名

瀬戸ならではの現代アート展覧会 ～物語は続いていく～

瀬戸現代アート倶楽部×商工観光課

課題・目的

瀬戸市は、産業・文化としての価値が高いものづくりのまちであるが認知度が低い。

瀬戸市内で活動を希望する若手作家が必要とする工房やギャラリーが少なく、現代アートを広める場所も少ない。ツクリテとまち、ツクリテと市民との交流を深め、地域の賑わいや文化の発展及び瀬戸の認知度の向上を目指す。

事業内容

国際芸術祭「あいち2025」開催期間中に、せと銀座通り商店街において、現代アート展覧会及び市民参加ワークショップ、ロクロ体験を開催する。

事業の成果

- ・ 瀬戸市はツクリテのまちとして様々なアーティストが活動しているが、地域との関わりが課題の一つであった。しかし、今回の展覧会を通じて、せと銀座通り商店街の協力店舗と事前準備から連携・準備をし、様々な協力を得られた。また、ツクリテと市民との関係性を深めることができ、今後の協力にも意欲を示していただいた。
- ・ 今回の展覧会を通じて、会場へは、3103名と当初予想を大きく超える入場者があった。これにより、市民はもとより多くの来場者に、瀬戸市で活躍するツクリテ及びその活動を認知いただけたこと。さらに、来場者とツクリテが直接知り合うことができたことが大きな成果である。
- ・ 今回は、国際芸術祭「あいち2025」の連携企画プログラムにも認定いただき、芸術祭の来場者が、本展覧会へもお越しいただき入場者増に繋がった。他市町からの来場者には、現代アートを通じ、瀬戸のツクリテここに有りということを認識いただくとともに、市民参加のワークショップやロクロパフォーマンスの実践により、身近に、まちの魅力及びやきもの文化を発信することができた。また、市民には、自らのまちの誇りと愛着の醸成に寄与することができた。

独自性

- ・ 瀬戸市を拠点に、ものづくり、現代アートの活動をしている愛知県立瀬戸工科高等学校や瀬戸市新世紀工芸館出身のツクリテを中心に団体を構成したことにより、地域に根差した展開ができ、学校関係者や新世紀工芸館研修生及び修了生へも大きく波及し、彼らのものづくりスピリット（魂）を醸成し、新たな創造力を引き出すことがで

きた。

- 歴史深いせと銀座通り商店街の「CAFÉ & GUESTHOUSE もやいや2階和室」を
展覧会会場としたことで、分かりにくいと思われる現代アートを身近に感じて
いただいた。また、多くの外国人からも日本の伝統的な和室でのインスタレーション展
示に感銘をいただき、「ワンドフル！」というお言葉をかけられた。さらに、ツクリ
テ自身によるワークショップも功を奏し、多くの市民及び来場者とツクリテとの交流
が生まれ、彼らの今後開催の展覧会のDMも持っていかれ、ツクリテの次なる活動へ
のステップにもなった。
- 多くの来場者から、和空間でのインスタレーション形式の展示に感銘をいただき、
帰る際には、「本当に良かった！」とか、「ゲストハウスでの演出が面白い」と、皆
さんに言ってもらい、企画冥利に尽きた場面が何回もあった。

活動の内容

実施時期：令和7年10月30日（木）から11月23日（日）までの22日間
（水曜日除く）

実施場所：せと銀座通り商店街「CAFÉ & GUESTHOUSE もやいや2階和室」、
商店街店舗（尾張屋、ノベルーガ、ギャラリーもゆ、little flower coffee、
三好佛具店）

活動内容：ワークショップ（以下のとおり）

実施日時	実施事業	参加者数
11月1日 11月8日	ガラスの石に絵を描こう！	65名
11月7日 11月9日	可愛い埴輪を作ってみよう！	30名
11月15日	糸と和紙で葉っぱを作ろう！	32名
11月3日 11月16日	ロクロ体験&パフォーマンス	135名

参加人数：3,103名なお、各商店街協力店舗の来場者数はカウントしていないが、
店主からのヒアリングから、期間中、展示作品を観に、多くの来店者があっ
たとの報告を受け、商店街の賑わいに貢献したものとする。

継続性・発展性

- 団体の自主的な財源確保の手法
今回の展覧会を通じて、ツクリテ自身の知名度も向上したと考えます。今後の継続的な活動を進めるために、愛知県立瀬戸工科高等学校及び瀬戸市新世紀工芸館、さらに、愛知県立名古屋高等技術専門学校窯業校のツクリテ同士の絆やネットワークが構築できた。こうした成果を生かし、新たな催事や、ツクリテ個人の作品販売等により財源を確保し、今後の展開につなげていきたい。
- 来年度以降の取り組み
今回の展覧会を通じ、商店街の各店舗の主人と絆及び交流が深まった。こうした成果を活かし、ツクリテと商店街の人たち、ツクリテと市民、ツクリテ同士と連携協力し、瀬戸市内のギャラリー的なスペースや展示場所を発掘し、新たな展開を模索していきたい。

協働の効果性

- 団体の役割
事業計画の検討及び確定、タイムスケジュールの確定
収支予算の適正な執行
PR チラシ及びポスターの作成
SNS (Instagram) の発信
国際芸術祭「あいち2025連携企画プログラム」申請及び許諾
商店街との連携打ち合わせ
会場運営及び当番業務
マスコミ取材対応（新聞社及びテレビ局：中日新聞2回、中日ホームニュース1回、中部経済新聞1回、読売新聞1回、朝日新聞1回、GCTV 報道1回、GCTV 生放送1回）
- 行政の役割
記者発表（令和7年9月25日付、瀬戸市記者クラブへ記者発表：秘書広報課）
広報せと記事掲載（令和7年10月号：多様性協働課）
せとまちサポーター案内発信（令和7年10月31日付：シティプロモーション課）
PR チラシ及びポスター配布（秘書広報課、商工観光課、文化課、瀬戸商工会議所、新世紀工芸館、せと銀座通り商店街、瀬戸まちづくり株式会社等）
- その他団体の役割
せと銀座通り商店街及び各店舗との連携協力

団体プロフィール

瀬戸現代アート倶楽部

活動開始年：2025年

代表者：チェ ユンジョン

会員数：13名

事例3テーマ「ツクリテによるまちの賑わい創出」

瀬戸の現代アートスタジオによる芸術文化交流事業

タネリ スタジオ ビルディング×商工観光課

課題・目的

国際芸術祭後に街ややアートが一時的に消費され、衰退する現象が各地で起きている。地域に根差した「ツクリテ」として何ができるかを模索し、持続可能な仕組みを構築することで、瀬戸市で行われる国際芸術祭「あいち 2025」開催後も、地域の芸術文化の振興を継続及び推進し、街の賑わいを持続させることを目的とする。

事業内容

ツクリテとの交流を軸に、作品展や陶芸などのアート体験を含む「茶会」をテーマとしたイベントプロジェクトを実施。また、瀬戸市周辺の有識者を招き、市民とツクリテの出会いと交流の場を創出する。

公益性・有効性

国際芸術祭「あいち 2025」をきっかけにスタジオを訪れた市民から「気になっていたが初めて訪れた」「地域にもアーティストがいることが知れた」等のお声をいただき、地域のツクリテの認知度が高まった。展覧会中に複数回足を運ぶ方も見られた。体験としての鑑賞を提供できた事で、「ツクリテがいるまち」という印象を持っていただくことができた。また、普段から展覧会を行っている場所であると知ってもらう機会となった。本事業で収集した 住所やメールアドレス、SNS のフォローによって今後の集客にも期待ができる。

独自性

現代アートに特化した集団であることを活かした展覧会を開催することで、国際芸術祭「あいち 2025」を目的に訪れた方々にこの地域では常に現代美術のシーンが存在する事をアピールできた。様々な素材や手法を融合させることが得意な分野である事を活かして、地域の窯元や小売店とのコラボレーションによって「瀬戸ならではの」の構成とした。地域の方からは親しみをいただき、市外の方には瀬戸の魅力をお伝えできた。作家と共にお茶をいただきながら鑑賞する鑑賞方法にした事で、会場では作家と観客との会話が弾み、「作家が身近な存在になった」「作品の話作家から直接聞けて作品についてわかったことで展示を見る事のおもしろさがわかった」などのお声もいただいた。

活動の内容

現代美術展示「ART 茶室×タネリ庵」

実施期間：2025 年 10 月 4 日(土)～11 月 30 日(日)の土日のみ開催 計 18 日

実施場所：TANERI STUDIO Gallery1F

実施内容： 展覧会鑑賞無料、振る舞いの煎茶体験あり

出展作家が約2週替わりで展示を構成(全4部制)。茶室設営と一体化した独自のインスタレーション形式で実施。観客とツクリテが交流できる場をつくり、各週ごとに作家が入れ替わって参加した。

第一部 植松 ゆりか(現代美術家)/栗原 光(画家)/日比野 曜(映像作家)

第二部 中山 なつき(陶芸作家)/設楽 陸(画家, VR アーティスト)/近藤 佳那子(画家)

第三部 鈴木 優作(陶芸家)/MITOS(画家)/加藤 ノブヤ(画家)

第四部 澤村 光李(陶芸家)/伊藤 仁美(映像作家)/高柳 あおい(画家)

参加人数：2095 名

【抹茶体験プログラム】

実施期間：毎週土日 11:00～12:00(二部制)/各回定員 3 名

参加人数：24 名

【トークイベント】

・10月26日(日)16:00～「文(あや)ありて、文(あや)なき境地」水野 雄介氏

参加人数：13 名

・11月9日(日)16:30～「ゴーゴーせとっこ!ド ライブ珍道中」タネリスタジオメンバー
日比野 曜

参加人数：8 名

・11月16日(日)16:00～「アートコミュニティの内 と外 コロナ以降の新しい共同体」
大野 高輝 氏

参加人数：12 名

＜周知方法＞

チラシの配布(チラシ 7000 部、ポスター100 枚)、企画団体の Instagram 投稿、広報せとへの掲載、旅系ウェブマガジンへの掲載、国際芸術祭「あいち 2025」の関連事業プログラムとして掲載 総動員数は、16 日で 2152 名となった。最大動員数見込みは 9 日間で 594 名を目標としていたので、大きく上回る集客となった。

継続性・発展性

本事業で獲得したリピーター・ファンに対して継続して今後の活動の案内を送付する。時間をかけてファンを増やし、ゆくゆくはボランティアスタッフや、事業の運営スタッフの増員につながるよう根気強く取り組む。事業継続のための資金源確保のための動きとしては、構成員のツクリテ達が制作した作品やグッズ・アトリエツアーやワークショップ体験チケットを返礼品としたクラウドファンディングの実施を計画している。

協働の効果性

「団体自身の役割」：企画・運営・実施

「行政の役割」：広報協力(広報せと掲載、市の関連施設へのチラシ配布)

「その他の団体の役割」：地域の小売店から茶菓子や茶葉を購入、トークイベントに有識者を招聘

団体プロフィール

タネリ スタジオ ビルヂング

活動開始年：2016年

代表者：植松ゆりか

会員数：12名

事例4 テーマ「外国人住民もまちづくりの担い手となる多文化共生のまちづくり」

日本語教室から始める多文化共生のまちづくり

特定非営利活動法人エム・トゥ・エム×多様性協働課

課題・目的

外国籍住民の不自由を日本人住民が理解しておらず、また、外国籍住民が日本語で日本人住民と会話することが難しいことが現状である。瀬戸市で暮らす外国籍住民が日本人住民と日常生活で関わりあい、隔てなく暮らすことが出来るまちを目指す。

事業内容

外国籍住民を対象とした日本語会話学習会を開催する。また、外国人住民主催のイベントを開催することで、抱えている困りごとを外国籍住民、日本人住民、行政が共有し、一緒に解決策を考え、取り組む場をつくる。

事業の成果

・外国籍住民の不自由を日本人住民が理解していない。外国籍住民が日本語で日本人住民を会話することが難しい。
⇒資格取得を目的とするのではなく（希望があれば対応）、日常生活に役立つ「会話力」を重視した内容で日本語教室を運営した。
レッスンを通じて会話を膨らませていく中で学習者/ボランティア間の関係が深まり、彼らの日ごろの生活の中で感じるストレスや悩み事も打ち明けてくれるようになった。それらを受け止め、対話をし、解決できることのお手伝いをすることができた。

・日本語で暮らす上での困りごとが多くあるが、解決の場に参加できない。
⇒当初は市役所庁舎のフロアマップの作成を予定していたが、多様性協働課との打ち合わせの中で、そもそも外国籍住民は自分がどの組織に行けばいいのかわからないことが本質的な問題ではないか、との認識に至り、暮らしのルールをまとめた冊子をつくることとなった。また、まずは瀬戸市で導入している多言語対応の周知を図ることから始めることとした。また、災害時の多言語コールセンターのトライアルを外国人住民に来庁いただいて行うことで、瀬戸市の取り組みを理解してもらう機会となった。

独自性

遡ると当法人では2006年から10年間、外国籍住民の無料健康チェックを医療機関と協力して行っていた。
コロナ禍の2021年1月、外国籍住民の仕事（派遣社員が多い）がなくなった／減ったことで生活自体が厳しくなっているという情報を得たことを機に、当法人がフードパントリー事業・子ども食堂事業を始めた。

その活動の中心にペルー国籍のスタッフが加わり、日本語会話を勉強したいという声が集められたことが2023年に当法人が教室を始めるきっかけとなった。

始めた当初はにほんご能力検定試験の受験を目指すテキストを利用したが、参加者から「日常生活に役立つ生きた会話力」の向上が求められるようになったことから扱うテキストも変わっていった。

教室では日常生活の話題をつなげていくため、彼らの職場や地域社会での困りごと・悩みごととも自然と共有されることになった。

また、今年度は10月に法人の活動の一環で、子どもたちの「体験格差」解消の一助になればと、当法人が指定管理を受託しているねむの森にてバーベキュー＋魚のつかみ取りイベントを開催した。教室や子ども食堂に来ている家族に声掛けしたところ参加者の約半数が外国籍となり、参加者同士が日本語で対話する様子も見られ、多文化共生の機会を提供できた。

活動の内容

1.日本語教室実施

実施時期：2025年4月～2026年2月

毎週日曜 16:30～、火曜 19:00～ それぞれ1時間の開催。各月最終週はお休み。

実施内容：クラスでは日本語の習得レベルに応じて3～4グループに分れて進めている。

参加人数：学習者参加人数延べ400名あまり。

学習者の延べ人数は昨年比若干減少したが完全に定着しており、今後も維持拡大を図る。

2.多言語対応のチラシ作り

瀬戸市の多言語対応について知らない外国籍住民が非常に多く、窓口への第一歩を促すために、瀬戸市が導入している多言語対応についてまとめたチラシを作成。

翻訳には瀬戸市国際センターとペルー国籍の学習者に参加してもらった。

配布先：日本語教室学習者、学習者の家族や知人、自国コミュニティ等

3.災害時多言語コールセンタートライアル

瀬戸市が令和7年度に新たに導入した災害時の多言語コールセンターについて、災害が起こった場合を想定し、トライアルを行った。避難所での多言語対応について、当事者に体験してもらうことでより具体的な情報の周知を図った。

実施時期：2026年1月30日

参加者：エム・トゥ・エム、学習者（ペルー国籍）、防災安全課、多様性協働課

継続性・発展性

・日本語教室

今後も継続する。参加者は定着傾向だが、日本語学習を希望する外国籍住民の受け皿としての役目を担う。

資金面では対象となる補助金・助成金を探し、充当していきたい。

あまりコストをかけずにテキストや公文プリント・カードなどのツールのコピーで工夫し続ける。

参加者の募集は HP や SNS で情宣を継続する。参加者の口コミで集まることも多いので呼びかけを続ける。

一方ボランティアスタッフメンバーは今年度 5 名が新たに加わった。うち 1 名は高校 1 年生、1 名は愛知県国際交流協会が主催した「日本語ボランティア入門講座 in 瀬戸市」の受講者。

・多言語対応のチラシ作り

スペイン語版は完成し、多様性協働課担当者に教室に来ていただき、スペイン語圏の学習者に配布した。また学習者でもあるペルー人の牧師には礼拝に集まる同胞に配布してもらった。

現在はポルトガル語とベトナム語にも翻訳を挑戦中。この 3 か国語ができれば現在の教室の学習者がカバーできる。AI 翻訳を活用し、コストを最小限におさえて完成させたい。

協働の効果性

・日本語教室

今年度は愛知県国際交流センターが主催する「日本語ボランティア入門講座」が瀬戸市で開催され、受講者としても参加させていただき、また当教室の紹介をする機会もいただいた。講座を通じて当教室に関心を持っていた方が現在ボランティア参加されている。

・瀬戸市の多言語対応サービスのチラシ作り

日本語教室で相談される外国籍住民ゆえの悩み事に向き合い、解決のお手伝いを続けている。

・日本で暮らしていくための簡便なルールブック的なものが存在しない

取り組み当初は市役所現場で多言語の MAP 作成を展望していたが、そもそも外国籍住民は自分がどの組織に行けばいいのかわからないことが本質的な問題ではないか、

であれば暮らしのルールをひとまとめにした「生活便利帳」を策定することで合意に至った。

その案に記載した項目

- 1 税金（所得税・市県民税）
- 2 国民健康保険
- 3 国民年金
- 4 ゴミ出しルール
- 5 市内日本語教室一覧
- 6 外国人相談窓口
- 7 市役所窓口での電話通訳
- 8 災害時多言語コールセンター
- 9 陶生病院医療通訳

策定を進める中、翻訳にかかる時間・コストに鑑み、より現実的な成果物として「瀬戸市の多言語対応」に絞ったチラシを先行することとした。記載項目は上記のうち⑤、⑥、⑦、⑧、⑨。

AI 翻訳を活用、国際センターとペルー人の方にチェックいただきスペイン語版を完成できた。

また、このうち今年度運用が開始された「災害時多言語コールセンター」については実際の場面で利用された場面がないため、防災安全課のご協力も得てペルー国籍の方（コミュニティーのリーダー的存在）に疑似体験いただく機会を設けた。体験した方も非常にスムーズな対応に満足いただき、コミュニティでの共有を約束してくれた。

団体プロフィール

特定非営利活動法人 エム・トゥ・エム

活動開始年：2004 年

代表者：服部悦子